

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A) 平1-233206

⑤ Int. Cl.⁴

A 61 K 7/00
7/02

識別記号

庁内整理番号

C-7306-4C
Z-7306-4C

④ 公開 平成1年(1989)9月19日

審査請求 未請求 請求項の数 4 (全5頁)

⑭ 発明の名称 油性化粧料

⑰ 特 願 昭63-58374

⑱ 出 願 昭63(1988)3月14日

⑯ 発 明 者 伊 奈 由 光 千葉県船橋市印内3-20-1

⑰ 出 願 人 花 王 株 式 会 社 東京都中央区日本橋茅場町1丁目14番10号

⑱ 代 理 人 弁 理 士 有 賀 三 幸 外2名

明 細 書

20重量%を含有することを特徴とする口紅。

1. 発明の名称

油性化粧料

3. 請求項第1項記載の液体油50～90重量

%及びワックス5～20重量%を含有するこ

2. 特許請求の範囲

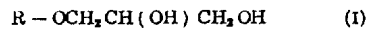
とを特徴とするリップクリーム。

1. 液体油を必須成分とする油性化粧料におい

て、次の一般式(I)

4. 請求項第1項記載の液体油20～80重量

%及び顔料20～60重量%を含有すること



を特徴とするファンデーション。

(式中、Rは炭素数12～24のメチル分岐

3. 発明の詳細な説明

飽和炭化水素基または不飽和炭化水素基を示す)

[産業上の利用分野]

で表わされるα-モノグリセリルエーテルを

本発明は、液体油を必須成分とし、実質的

60～100重量%含有する液体油を用いる

に水を含まない、使用感及び化粧持ちが共に

ことを特徴とする油性化粧料。

優れた油性化粧料に関する。

[従来の技術]

2. 請求項第1項記載の液体油40～90重量

%、ワックス5～20重量%及び顔料1～

油性化粧料としては、代表的なものとして

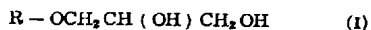
口紅、リップクリーム、ファンデーション、

ファンデーションスティック等がある。これらの油性化粧品は、液体油中に顔料、粉体、ワックスなどを分散させ、皮膚上に塗布するものであり、この液体油として粘度の低いものを用いることにより、化粧料ののびを軽くし、顔料などを皮膚上に均一に薄く塗布できるようにしている。

〔発明が解決しようとする課題〕

しかしながら、のびの良い化粧料を得るために粘度の低い液体油を用いると、のびは軽くなるものの、液体の粘度が低いため、塗布後の顔料が落ちやすくなる。従つて、塗布後の顔料を落ちにくくするためには液体油の粘度を高くしなければならず、のびが重く、皮膚上に均一に薄く塗布することが難しくなる。

る油性化粧品において、次の一般式(I)



(式中、Rは炭素数12～24のメチル分岐飽和炭化水素基または不飽和炭化水素基を示す)

で表わされる α -モノグリセリルエーテルを60～100重量%含有する液体油を用いることを特徴とする油性化粧料を提供するものである。

本発明で用いる一般式(I)で表わされる α -モノグリセリルエーテルは、常温(25℃)で液体もしくは半固型であることが好ましく、このためには一般式(I)中の炭化水素基Rの炭素数が12～24、特に16～20であることが好ましい。

一方、揮発性の液体油を用いると、塗布時には液体の粘度が低いため軽くのび、塗布後には揮発性の液体が揮発することにより、系の粘度が増加し顔料が落ちにくくなるが、揮発性の液体油が蒸散するため液体の量が減少し、油性感が低下してしまう。例えば、口紅などの場合、塗布後のつやがなくなつてしまふ等の欠点があつた。

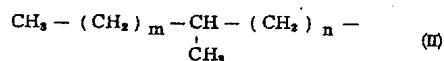
〔課題を解決するための手段〕

斯かる現状において本発明者らは鋭意研究を行つた結果、特定のグリセリルエーテルを含有する液体油を用いた油性化粧品は、使用感が良く、化粧持ち及び仕上がりが優れていることを見出し、本発明を完成した。

すなわち本発明は、液体油を必須成分とす

また一般式(I)で表わされる α -モノグリセリルエーテルのうち、メチル分岐飽和炭化水素基を有する α -モノ(メチル分岐アルキル)グリセリルエーテルは、例えばイソプロピリデングリセロールのアルカリ金属アルコラートにR-X(Xはハロゲン原子、Rは前記した意味を有する)で表わされるハロゲン化アルキルを常法によつて反応せしめて2,3-0-イソプロピリデン-1-0-メチル分岐アルキルグリセリルエーテルとなし、次いで、これを加水分解することにより製造される。

この α -モノ(メチル分岐アルキル)グリセリルエーテルのうち、好ましいものとしては、(I)式中Rが次の基(II)、



(式中、 m は2～14の整数、 n は3～11の整数で、 $m+n$ は9～21、好ましくは11～17の整数を示す)

で表わされるものが挙げられ、就中、特にメチル分岐アルキル基の炭素数分布が炭素数18のメチル分岐アルキル基を75%以上含有するもので、 m が6～8のものが好ましい。

また、不飽和炭化水素基を有する α -モノグリセリルエーテルとしては、例えば α -モノオレイルグリセリルエーテル等が挙げられる。 α -モノオレイルグリセリルエーテルはセラキルアルコールとも呼ばれ、サメ肝油中等に存在する天然物である。

本発明で用いる液体油としては、これらの成分の他に例えば液状を呈するものとして、

通常40℃以上で溶融する油であり、代表的な例としてカルナウバワックス、キャンデリラワックス、ライスワックス、モクロウ、ミツロウ、セレシンワックス、ミクロクリスタリンワックス、パラフィンワックス、硬化牛脂、硬化ヒマシ油、硬化ホホバ油、ポリエチレンワックス等が挙げられる。一方、油ゲル化剤とは油溶性の界面活性剤であり、代表的な例として脂肪酸の多価金属塩(金属石鹸)、ジアルキルリン酸の多価金属塩、デキストリン脂肪酸エステル等が挙げられる。

また、皮膚、粘膜の着色を目的として酸化鉄、酸化チタン、群青等の無機着色顔料、化粧品用法定色素をアルミニウム、カルシウム等で不溶化したレーキ顔料、さらにはタルク、

流動パラフィン、スクワラン、低沸点インパラフィン等の炭化水素油；オリーブ油、ヒマシ油、2-エテルヘキサ酸トリグリセリド、2-エテルヘキサ酸ジグリセリド等のトリまたはジグリセリド油；ホホバ油、イソプロピルミリステート、オレイルオレート等の脂肪酸と一価アルコールとのエステル油；ジメチルポリシロキサン、メチルフエニルポリシロキサン、環状シリコン等のシリコン油等が挙げられる。また、半固型を呈するものとしては、例えばラノリン、ワセリン等が挙げられる。

さらに、本発明の油性化粧料を固型化するためには、ワックスもしくは油ゲル化剤を用いる。ワックスとは常温(25℃)で固型で、

カオリン等の体質顔料やマイカ、有機ポリマー微粒子と染料、着色顔料とを複合した複合顔料等を用いることができる。

さらに本発明の油性化粧料には、必要に応じて酸化防止剤、紫外線吸収剤、防腐剤等の安定化剤；消炎剤、ビタミン、ホルモン、抗菌剤等の薬効剤；その他グリセリン、プロピレングリコール等の保湿剤等を配合することができる。

本発明油性化粧料の最終形態における好ましい配合量は以下のとおりである。

以下 余 白

第1表

| (重量%) | | | |
|---------|-------|---------|----------|
| | 口紅 | リップクリーム | ファンデーション |
| 本発明の液体油 | 40~90 | 50~90 | 20~80 |
| ワックス | 5~20 | 5~20 | 0~10 |
| 顔料 | 1~20 | 0~1 | 20~60 |

に優れている。また、塗布後においては皮膚もしくは吐息から塗布膜中に水分が添加され、粘度の低い等方性液体が粘度の高い液晶相へと転相するため、塗布膜の粘度が高くなり顔料が落ちにくく、化粧持ちが優れたものである。また、油性感も損なわれることがなく、例えば口紅に使用した場合には高いつやを維持することができる。

〔実施例〕

次に実施例を挙げて本発明を更に詳細に説明するが、本発明はこれら実施例に制限されるものではない。

実施例1

口紅：

第2表に示す組成の口紅を常法により調製

〔作用及び効果〕

本発明の油性化粧料に用いる α -モノグリセリルエーテルは、水の無い状態では等方性の液体であり、少量(1~40重量%)の水が添加されると粘度の高い液晶相を形成する。そして、さらに水を添加すると液晶相と水相の二相分離系を形成し、O/W等の乳化系は形成しない。この性質は少量の非極性で低粘度の液体油(0~40重量%)を添加しても変わらない。

従つて、本発明の油性化粧料は、液体油が粘度の低い等方性液体の状態、その中に顔料などの粉体を分散させることにより調製されるため、化粧料ののびが軽く、皮膚上に顔料を薄く均一に塗布することができ、使用感

し、専門パネラー10名により次の評価基準で官能評価を行つた。結果を第3表に示す。

＜評価基準＞

◎：10名中8名以上が良好と評価した。

○：10名中6名以上が良好と評価した。

△：10名中4名以上が良好と評価した。

×：10名中3名以下が良好と評価した。

以下余白

特開平1-233206 (5)

第 2 表

| 組 成 (重量部) | 本発明品 | 比 較 品 | | | |
|-------------------------|------|-------|-----|-----|--|
| | L-1 | L-2 | L-3 | L-4 | |
| カルナバワックス | 2 | 2 | 2 | 2 | |
| セレンシ | 8 | 8 | 8 | 8 | |
| キャンデリラワックス | 3 | 3 | 3 | 3 | |
| マイクロクリスタリンワックス | 2 | 2 | 2 | 2 | |
| 流動パラフィン | 0 | 6.7 | 0 | 1.0 | |
| ヒマシ油 | 0 | 0 | 6.7 | 0 | |
| 環状ジメチルポリシロキサン | 0 | 0 | 0 | 5.7 | |
| α-モノイノステアリルグリセリルエーテル(*) | 6.7 | 0 | 0 | 0 | |
| ホホバ油 | 1.0 | 1.0 | 1.0 | 1.0 | |
| 酸化チタン | 2 | 2 | 2 | 2 | |
| 顔料 (赤色 202 号) | 2 | 2 | 2 | 2 | |
| 顔料 (赤色 204 号) | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| 顔料 (黄色 4 号 A8 レーキ) | 3 | 3 | 3 | 3 | |
| 抗酸化剤 | 適量 | 適量 | 適量 | 適量 | |
| 香 料 | 適量 | 適量 | 適量 | 適量 | |

にも優れているものである。

実施例 2

ファンデーション：

第 4 表に示す組成のファンデーションを、
常法により調製した。

第 4 表

| 組 成 (重量部) | 本発明品 | 比 較 品 | | |
|----------------------|------|-------|-----|--|
| | F-1 | F-2 | F-3 | |
| マイカ | 5.0 | 5.0 | 5.0 | |
| 雲母チタン | 9 | 9 | 9 | |
| 酸化鉄 | 1 | 1 | 1 | |
| 群 青 | 2 | 2 | 2 | |
| 流動パラフィン | 0 | 2.6 | 0 | |
| リンゴ酸ジイノステアリル | 0 | 0 | 2.6 | |
| α-モノイノステアリルグリセリルエーテル | 2.6 | 0 | 0 | |
| パラフィンワックス | 5 | 5 | 5 | |
| 分岐脂肪酸コレステリルエステル | 7 | 7 | 7 | |
| 抗酸化剤 | 適量 | 適量 | 適量 | |
| 香 料 | 適量 | 適量 | 適量 | |

(*)一般式(I)において、炭化水素基 R の合計炭素数が 18 (式(II)における m と n の和が 10)であるものが約 75% を占め、残りの成分は、合計炭素数 14、16 のものであり、分岐メチル基はいずれもアルキル主鎖の中央部付近に位置するものの混合物。

第 3 表

| 試 験 項 目 | 本発明品 | 比 較 品 | | | |
|---------|------|-------|-----|-----|--|
| | L-1 | L-2 | L-3 | L-4 | |
| にじみにくさ | ◎ | △ | △ | ◎ | |
| 色 落 ち | ◎ | × | × | ◎ | |
| つやの持続性 | ◎ | × | × | × | |

第 3 表から明らかなように、本発明の口紅は、にじみにくさ、色落ち、つやの持続性と

本発明のファンデーションは化粧持ち (化粧粧ぐずれ) において、比較品よりも明らかに優れていた。

以 上

出 願 人 花 王 株 式 会 社

代 理 人 弁 理 士 有 賀 三 幸

弁 理 士 高 野 登 志 雄

弁 理 士 小 野 信 夫